【資料１】

ヘルト・オグラー、西川好夫訳『アドラー心理学入門』清水弘文堂　1976.
Alfred Adler The Man and His Work: Triumph over the Inferiority Complex 1963.

「第二章　精神生活への三つの入口」

王座を失う

p.45

　最年長の子どもは、自分が類のない状況にあることを知っている。その子どもの誕生は大きな喜びをもって迎えられるのがふつうで、彼は、両親のみならず、祖父母からも、多くの親戚からも喜び讃えられ、甘やかされるし、自分のすること、言うことが注目され、拍手喝采されるのに慣れている。彼の不動の印象は、「ぼくは注意の中心だ」ということである。彼はしばらくの間この状況をつづけるが、（そのしばらくは）二番目の子どもがいつ生まれるかにかかっている。(二番目の子どもが生まれると)、年上の子どもはある悲劇を経験することになる。彼は、突然、家中の注意が自分を離れて、新しく生まれてきた赤ん坊へ移ったことを知る。最年長の子どもだけに注がれていた愛をいまやほかの者と分かち合わねばならない。もしも彼があまり騒々しい遊びをすると、しずかにしなければいけない、さもないと赤ちゃんが目をさますから、と言われる。彼が母親や乳母に用事があっても、母親や乳母が赤ん坊の世話をしおえるまで待たねばならない。彼は自分がもはや全能の支配者ではないことを実感する。アドラーの表現にしたがえば、彼は「王位を追われた」のである。しかし、一度権力を享受したものは、なにはともあれ、その保持のために戦うことなしに、むざむざその権力を放棄することはしない。こうして、年長の子どもは彼の無益な戦いをはじめるのである。彼が甘やかされていればいるほど、ますます彼は突然の（権力）喪失をきびしく感じるだろう。そして、彼は、古い地位を保持しようとして、自分の自由になるあらゆる手段を用いるだろう。彼はおとなたちを困らせはじめる。彼は腕白になり、強情になる、時間どおりに食事をしたり寝たりすることを拒む、あるいは一旦はベッドに入ってもなかなか眠らない、彼は自分のおもちゃをこわす（というふうに…)。ところが、両親は、子どものこうした行動のいわれを理解しないから、我流で子どもと争ってこの行動に反応するという誤りを犯すこともしばしばである。柔順でないからといって子どもを罰しはじめると、子どもは、ただもう第二子が生まれたために、自分の状況が変わってこんなに大きな損害を受けたのだ、となおさら固く信じるようになる。彼は二番目の子どもに向かって憎しみの感情をあらわすかもしれない。アドラーはこの種の憎悪を本能的衝動とはみなさないで、子どもたちの教育において親たちが犯した誤りの結果だと考えている。

父親と母親

p.47

父親が母親よりもやさしいときには、われわれは、最年長の子どもが父親に頼って、その寵愛を得ようと努めるのを見ることがしばしばある。ある子どもが父親のほうに愛情を感じはじめると、このことは両親に対する関係の第二段階を意味する。アドラーの意見はこうである、あらゆる子どもは最初は母親のほうに愛着を示すが、母親に対する愛に失望したときにのみ、子どもは父親に頼る、と。最年長の子どもは、母親に向かって、敵意の感情、いや憎しみの感情をさえあらわすことがしばしばある。ある人が、後年、母親に向かって、あるいは家族内の他の子どもたちに向かって示す否定的な感情は、たった今述べたばかりの児童期の悲劇から説明できるものである。

フォンターネの自叙伝

A. Adler, The Education of Children

p.48

最年長の子どもたちは、後に事態が見抜けないと、いつも彼らの失った楽園の古い状況を取り返そうと努めるだろう。彼らの目は後方を見ているわけである。彼らは過去の讃美者であり、しばしば未来に関する大悲観主義者である。彼らはかつて権力を経験したが、（現在も）権力の崇拝者としてとどまっている。アドラーが最年長児の原型を探求していたとき、ドイツの作家、フォンターネの日記の中に、フランスの移民だったフォンターネの父親は、50 年代のポーランド＝ロシア戦争の際は無条件にポーランド側だった、という趣旨の覚え書を見つけた。二万のロシヤ軍が一万のポーランド軍のために退却をよぎなくされた、ということを前線からの報告で読んだとき、フォンターネの父親は喜んだ。フォンターネはこの点に注目して（こう書いた）。「私には、どうして誰も彼もがこのことを喜ぶのか、それが理解できなかった。私にはいつも、二万のロシア軍は、一万のポーランド軍に対して、数の上でも力の上でも優勢でなければならない、という気持があった。私は、私の意見がふつうの良心的な人の意見と必ずしも一致しないことを知っているが、しかし、なぜ私がつねに“力は力としてとどまらねばならぬ”という立場をとっているか、を知るためのてがかりを与えるだろう」。アドラーはこの文章を読んでこう言った、「この人は最年長の子どもだったにちがいない。最初に生まれた者だけにこういうふうな考え方ができるのだ」と。フォンターネは実際に長子だった。

最年長の子どもたちはふつうその弟妹に対してなにがしかの権威をもち、こうして力の利益を知るものである。彼らはこのことから権威や法に対する関心の目を開かせられるし、又権威が維持されるように努めもする。彼ら自身は親の権威に従っているが、学校でも、彼らはしばしば先生を助けて秩序を維持するがゆえに、先生のお気に入りの生徒である。

組織への適応
p.49
　最年長の子どもたちはしばしば非常に有能な公務員、それも官吏になる。そして、几帳面さと誠実さとでめだつ存在になる。彼らはしばしば大きな組織の首脳部である、なんとなれば、彼らは幼い日に組織することを学ばねばならなかったから……。

親を真似ることについて
R ドライカース、宮野栄訳『アドラー心理学の基礎』一光社、1996.
Fundamentals of Adlerian Psychology
「家族布置」p.75
　子どもが親の特徴を自分のものにしようと努力するのは、自分の同盟者である親に似ている明確な性格を示すことによって、家族の他のメンバーに対抗し、それによって優越性を手に入れようと望んでいるからなのです。また、権力を手にいれたいという点においては同じなのですが、直接衝突している親を真似る子どもも多くいます。多くの期待を子どもに押しつけ、そして非常に厳しい親は、子どもの概念では「権力」そのものなのです。子どもたちが、自分が恐れている親を真似る理由はこれです。彼らは単に親のこの「権力」を手に入れたいだけなのです。だから私たちは、子どもの性格の発達を支配している法則、すなわち「子どもたちは、家族布置の中で意味を追求したり、また、ある程度の権力や優越性を獲得することを期待して、それらの特性を訓練する」ということ以上のことを述べることはできません。

【資料２】

Robert Powers & Jane Griffith,
Understanding Life-Style: The Psycho-Clarity Process, 1987.

Chapter 8: Psychological Birth-Order Vantage

We use the term vantage instead of position (more common in discussions of birth order) to emphasize the distinction between psychological birth order and ordinal position. We want to consider how each child's situation in the family provides a unique perspective from which to view self, others, and the world. Thinking in terms of perspective rather than position helps the interpreter understand the particular use this one person made of particular place in a particular family.

心理学的な出生順位と序列的な位置との区別を強調するために、（出生順位の議論では一般的な）位置ではなくバンテージ（有利な点・優位）という言葉を使う。私たちが考えたいのは、家族の中でそれぞれの子どもが置かれている状況が、自己、他者、そして世界を見るためのユニークな視点をどのように提供しているかということである。位置ではなく観点で考えることで、分析者は、ある人がある家族の中である特定の場所をどのように使っていたかを理解することができる。

This terminology also helps to avoid an implication of causal determinism in birth order. "You are bound to do [whatever]: you're a first born." is an example of typological errors that obscure the genius of Individual Psychology, "the task of [which] is to comprehend the individual variant." as Adler said (p.180).

この用語法はまた、出生順位の原因論的決定論の含意を避けるのにも役立つ。あなたは[何であれ]する運命にある：あなたは長男なのだから」は、アドラーが言ったように、「[その]課題は個人の変種を理解することである」個人心理学の天才を曖昧にする類型論的誤りの一例である。

The Vantage of the First Born

The perspective common to these children is upward, forward, toward the adult world and its standards, and away from the world of the other children, except when sharing the concerns of the adults over them.

第一子の有利性

これらの子どもたちに共通する視点は、上へ向かう、前へ向かう、大人の世界とその基準に向かうものであり、他の子どもたちの世界から離れようとするものだ。ただ、大人が彼らに関心を示す場合はその限りでない。

Remember that a first born was, for a time, an only child. First borns often retain some of the characteristics of onliness, including loneliness. Such persons

have a sometimes poignant sense of personal uniqueness. They may practice self-reliance as if sensing it to be a necessity, as people do who are accustomed to being left alone to solve problems. They may be less at ease with members of their own age cohort than younger children are, sometimes feeling prepared only for places among the elders of any group to which they belong.

第一子は一時期、一人っ子だったことを思い出してほしい。第一子は、孤独を含め、唯一無二という特徴を保持していることが多い。そのような人は、自分の独自性を時に痛切に感じることがある。問題を解決するために一人にされることに慣れている人がそうであるように、自立することが必要だと感じているのかもしれない。年少の子どもたちよりも同年代の仲間との付き合いが苦手で、自分が属する集団の年長者との間でしか、平穏な関係を築けないと感じることもある。

Adler noted (p.378) that first borns tend to be conservative in outlook, because they are nostalgic about the lost golden age of their only child status, from which they were dethroned by the birth of a younger sibling. Adler thought that this fictional overvaluing of the past brought with it a greater respect for tradition, concerns for law and order, and caution in assessing innovations. It is true that most first borns experienced themselves as very important persons in their “good old days.” Indeed, they often were. They made wives and husbands into mothers and fathers, and (when they were also the first grandchildren) promoted the parents of their parents into grandparents, another important social role. More photographs were taken of them than were taken of their younger siblings, and their families kept more complete records of their first words, and fist teeth.

アドラーは、第一子は保守的な見解である傾向があると指摘している。それは、弟妹の誕生によって奪われた一人っ子の黄金時代を懐かしむからである。アドラーは、このような仮想の過去への過大評価が、伝統への敬意、法と秩序への関心、革新に対する慎重さをもたらすと考えた。ほとんどの第一子が「古き良き時代 」に自分たちを非常に重要な人物だと感じていたのは事実である。実際、彼らはしばしばそうだった。彼らは、妻と夫を母と父に変え、（初孫でもある場合は）両親の両親を、これもまた重要な社会的役割である祖父母に変えた。彼らの写真は、弟妹の写真よりも多く撮られたし、家族は彼らの最初の言葉や最初に歯が生えたことをより詳細に記録した。

Later-born children often complain about this, unaware as they are of the negative features of such a special status. A great deal can be expected of first-born children. For example, a younger sister was called The Baby at a much later age than that at which her first-born sister had become The Big Girl. This title came with “all the rights and privileges thereunto appertaining,” but with some matching burdens as well. Many first borns become perfectionists in the effort to meet the challenges of parental expectation (and later, to do what they believe is required of them if they are to have a place among others). They are often constricted by righteousness, unable to see how they are of any value unless they are doing something wonderful or (even more important) admirable.

後から生まれた子どもは、そのような特別な地位のマイナス面を知らないため、しばしばこのことに不満を口にする。長子には多くのことが期待される。例えば妹は、第一子の姉が「お姉ちゃん」になった年齢よりもずっと遅い年齢で、「赤ちゃん」と呼ばれる。この称号には「それに付随するすべての権利と特権」が伴うが、それに見合った負担もある。第一子の多くは、親の期待に応えようとするあまり、完璧主義者になる（そして後には、他の人たちの間に居場所を持とうとして、自分に求められていると信じることを実行するようになる)。彼らはしばしば正しさに縛られ、何か素晴らしいこと、あるいは（さらにもっと大切な）賞賛に値することをしない限り、自分に価値があると考えることができない。

The sense of obligation to do only things that are outstanding leads to hesitation, stalling, and a dread of engaging in anything. After all, whatever anyone does can always be improved upon. A style of procrastination (sometimes disguised as preparation) may burden first borns. They experience anxiety (an expectation of defeat of humiliation) in the presence of opportunities they first define as obligations and then feel unable to refuse. Achievement, leadership, an interest in exploration, and the first-born vantage all go together when these children are encouraged, appreciated for what they can do, and respected for how they choose to do it, without the burdens of unrealistic expectations.

優れたことだけをやらなければならないという義務感が、ためらいや行き詰まりを生み、何事にも取り組むことを恐れるようになる。結局のところ、誰が何をするにしても、常に改善することができるのだ。先延ばしにするスタイル（時には準備に見せかけている）が第一子を苦しめる。彼らは、まず義務だと受け取り次に拒否できないと感じるような機会を前にすると、不安（屈辱という敗北の予感）を経験する。達成感、リーダーシップ、探求心、第一子の有利性は、この子たちが非現実的な期待という重荷を背負わされることなく、勇気づけられ、できることを認められ、どのように行うか選択したことを尊敬されたときに実現する。

Adler was a second born, and described first borns with more than a hint of the asperity, impatience, and failure to sympathize many second borns feel toward their older siblings. His observations about first-born characteristics should therefore be read with some care. All of Adler's comments on the various sibling positions are, in fact, suspect as general rules; they should be studied only to show how he framed his hypotheses for reaching an understanding of the unique variant, and to sharpen awareness of the differences in phenomenological field made likely by different birth-order vantages. The study of Individual Psychology can contribute greatly to clinical sensitivity; it is not a substitute for it.

アドラーは第二子であり、第二子の多くが兄姉に対して抱く辛辣さ、焦り、同情の欠如を少なからず含みながら、第一子について述べている。したがって、長子の特性に関するアドラーの見解は、ある程度注意して読む必要がある。さまざまなきょうだいの立場に関するアドラーのコメントはすべて、実際のところ、一般的な規則としては疑わしいもので

ある。それらは、彼が独自の変種を理解するための仮説をどのように組み立てたかを示すため、また出生順位の違いによって生じる現象学的な場の違いに対する認識を研ぎ澄ますためにのみ研究されるべきである。個人心理学の研究は、臨床的な感性に大きく貢献することができるが、その代わりにはならない。

【資料３】

野田俊作『続アドラー心理学トーキングセミナー』1991.　p.50 欄外
＊忠告しておきますが、性格類型学なんてものはそれほどアテにしない方が安全です。たとえば、世間で有名な血液型性格占いは、いかにもそれらしい感じがするのですが、厳密な心理学的研究ではまったくデタラメだということが証明されています。実際、私の友人に「典型的 O 型性格」を自負しているのがいましたが、あるとき血液検査をしたら、O 型じゃなくて A 型だったんです。その程度のものなんですよ。血液型だけじゃなくて、きょうだい順位による性格分類だって、アテにしてもらっては困ります。アドラーが言ったから、しかたなく私の義理で書いているだけで、そんなに信じてはいないんですよ、ホントは。

野田俊作『劣等感と人間関係』2017.　p.74 欄外
＊性格類型学は信頼できません。きょうだい順位による性格分類だって、そのまま鵜呑みにしてもらっては困るので、個々の場合によってまったく違ってきます。ある意味で、アドラーが言ったから、仕方なく私はその話をしていますが、そんなに信じていないんですよ、本当は。そもそも「なんとか型性格」というのは一種の差別発想だと思います。人は一人一人違っていて、パターン分けなどできないんです。